



編集長(ダン シロウ)

■新しい執筆者を募って書いていただく。長年の執筆者にも、書きたいことのある限り書いていただく。

マガジンがドンドン厚くなるのは構わない。それはWeb雑誌の利点だ。誰も読み切れないほど分厚くなったとしても、バックナンバーが揃っている限りいつも、何処かの、誰かにとって貴重な資料になるはずだ。

しかし人の気力も、命にも限りはあるのだから、勇退されることはさまたげない。それが結果的に世代交代になっている形も想定内だ。

上世代が突然に引退を口にして譲ろうとしたり、下世代がポジションの交代を要求したりしているところに、本当の意味での継承、交代は起こらないのではないかと思う。長寿社会に於ける智の併走こそ、あるべき姿なのではないか。

支払いや、掲載条件を云々しなくてもよいツールが手に入ったことで、そういう従来の作法から、私達が自由になったのだ。掲載分量や回数を区切らなければならないと思ってしまうのは、旧来型の発想だ。この事は、もっときちんと考えておく必要がある。

死ぬまで現役の方も、新たな気持ちで再登場の方も歓迎である。是非、意欲的なエントリーをどうぞ。ロング アンド ワインディング ロードである。みんなで成果を築いていこうではありませんか。

編集員(チバ アキオ)

★目が覚めた…、朝だ…少しむこうに子どもが寝ているなあ。どこかでみたことがあるなあ。みたことがあるというよりも、とてもなじみのよく知っている顔だ。そうそう、こうして自分もねてみて

景色だ。相手も寝ていて…。でも、こんなにかわいらしい子どもだったかな…そうだと思い出した。

夏休みに学生時代の友人家族と山小屋に宿泊した。そう、なじみの顔は、友人の娘さんだ。学生時代、一人暮らしのその友人宅などで、よくみんなで深夜まで遊び、しゃべり倒し、そのまま寝ていた。雑魚寝で。その時に見ていた風景と重なったのだ。

山小屋は、その友人の母の山小屋である。場所は熊本県阿蘇の高森町。空気もおいしく自然に囲まれ、阿蘇の雄大な景色ときれいな水…。以前にも宿泊させてもらったことがある。今回はその友人のお母さんにもごあいさつすることができた。会いたいからと時間を作ってくれた。友人の母は友人が学生の頃に同じ大学の大学院に通っていて、学生時代も私たちはお世話になった。お母さんは「前に山小屋に来た時の日記があるんとちがうかね」と山小屋日記を出してきてくれた。お母さんは山小屋をゆかりのある様々な方が利用できるようにされてきた。そして利用した人には日記を記すことを勧めることを20年ぐらい続けてこられたそう。日記をみると様々な方が山小屋を訪れているのがわかった。その中に1999年秋に自分が書いたものがあつた。15年前の自分だ。そこにはもう一度来ることが誓われていた。その言葉を15年後の自分が実行したのだ。15年前の1999年は節目の年だった。思い出しても、いろいろと思うところがある。こうした場面を作ってくださった友人と友人の母に心から感謝である。友人は今、節目のようだった。そんなときに再会できてよかった。何年かぶりに会っても、あの時と同じのようで、でもあの時から続いていて、そして重ねてきたものも持ち合っていると思える時間を作ってくれる友に感激である。

★新連載は「ラホヤ村通信」高垣愉佳さんと「ハチドリ」見野大介さん。高垣さんはアメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴでの生活で感じたこと、考えたこと、やってみたことを届けてくださることになりました。発見あり、驚きあり…でも暖かい。連載が楽しみです。もう一方は見野大介さん。陶芸家です。陶芸家として受賞もされたり個展もされたりと大活躍です。同時に障害者施設でのアートサポートスタッフもされています。また、師匠に弟子入りという経験もしています。

われわれ援助職にはない仕組みの経験も興味深い。使い勝手もよく、なおかつ洗練された作品の数々。是非ご堪能ください。

編集員(オオタニタカシ)

いつもながら、あっという間に3か月が経ちました。春から秋にかけては職場で研修の仕事が多い時期です。研修関係の仕事は企画と運営がメインになりますが、今年度は何度か外部の研修で講師を務めさせて頂く機会もありました。そのうちの1つはこのマガジンを読んで声をかけて下さったとのことで、仕事とそれ以外でしていることが段々とつながってきている気がします。少し気後れもありましたが、よくよく考えれば先日で36歳になり、年齢的にもそうした役割を担う時期に入ってきたということなのかもしれません。これまで仕事柄、研修を受けたり、誰かに何かを教えてもらうという機会は人より多くもらっていたと思います。色々な先生方と同じことはできませんが、自分の身の丈に合ったところで、少しずつ変わっていく自分の役割を担っていければと思います。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランブラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻18号

第五巻 第二号

2014年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十九号は2014年12月15日
発刊の予定です。

原稿締切2014年11月25日！
常に、新規連載者を募っています。
**編集部まで執筆企画を
お知らせ下さい。**

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

2015 マンガ展 in NY用の一作、「Doors」の中の一コマである。

自分の中で「まさかこんな事になるとは思わなかった選手権」をやったら、第一位はこのNYマンガ展だ。本当に瓢箪から駒だった。目標でも何でもなかったし、個展をやって、それでどうするというモノでもない。ただ、ワクワク。まったく不思議なことがあるモノだ。

だからこの先も、何があるか分からない。ただただ、それを楽しむことにする。未来は予測がつかない。言い当てたところで、たいした意味はない。分からないものだなあ・・・ということを楽しむ。そしてそれがだんだん分かってきたら、それに流れの道筋を付けるくらいの計画を立てる。

2014/9/10